

# しつら アーカイブの設え

細井 浩一 (ZEN 大学教授 / コンテンツ産業史アーカイブ研究センター所長)

E-mail hosoik@me.com

## 要旨

外来語としてのアーカイブには、ギリシャ語の語源とその後の西洋社会の成り立ちに起因する語意と語感が固着している。アーカイブという公共の営為が今後の日本社会において果たす役割を考えた時、その有り形についてより繊細なニュアンスを理解することが必要になる。漢字圏としての日本社会においても、歴史的にアーカイブに相当する営為はあり、特に「くら」(倉、蔵、庫)の語義とその相違について比較するとともに、もう一つの「くら」である「府」とその豊かな語義と可能性について考察する。

## abstract

The word “archive” as a loanword has a fixed meaning and feel that derives from its Greek origins and the subsequent development of Western society. When considering the role that the public activity of archiving will play in Japanese society in the future, it is necessary to understand the more subtle nuances of its form. Even in Japanese society, which is a kanji-using country, there have been activities historically equivalent to archiving, in particular, we will compare the meanings of the word “kura” (倉蔵庫) and its differences, as well as considering the other “kura” - “fu” (府) and its rich meanings and possibilities.

## 1. はじめに

「アーカイブ」という外来語は、すでに公私、官民を問わず広く社会に浸透していると言って良いであろうか。分かりにくい外来語を分かりやすくするための言葉遣いの工夫という趣旨で公表されている 2003 年の国立国語研究所の言い換え提案においては、国民の理解度が 25%以下 (最低ランク)とされており、言い換え語として「保存記録」、「記録保存館」が推奨されている<sup>1)</sup>。

しかし、その提案時期以降の肌感覚としては、NHK アーカイブズや国立映画アーカイブなどの公共組織をはじめとして、本稿が主な対象とするメディア芸術分野<sup>2)</sup>においても、マンガアーカイブ機構やアニメ特撮アーカイブ機構など、「アーカイブ」を冠した各種団体が活発に活動をはじめている。さらに、同分野をめぐる行政や民間企業、団体個人のレイヤーにおいても保存記録あるいは記録保存という少し重々しい言葉を用いるのではなく、アーカイブというスマートな外来語を用いることが多いという印象がある<sup>3)</sup>。

また、メディア芸術に限定するわけではないが、アカデミズム全般を見ても、アーカイブを名称や趣旨に明

記する学会の活動は活発であり、本稿の執筆段階においては、CiNii で「保存記録」を検索語とした論文数は 11 本、「記録保存館」はゼロであったが、他方「アーカイブ」(アーカイブスあるいはアーカイブズを含む)は 14,767 本に上っている<sup>4)</sup>。

このように、「個人や組織が作成した記録や資料を、組織的に収集し保存したもの。またその施設や機関」<sup>5)</sup>を意味する外来語である「アーカイブ」は、いわば常用語として多用され、内容と種類において非常に振幅のある記録物や資料体を集めて保存する活動を体現するワードとなりつつある。

本稿は、このような現状や、アーカイブという用語が有する実践的な利便性、訴求性に直ちに疑問を呈するということを目的としていない。その日本語化と浸透は今後も拡大していくであろうし、むしろ、時の移ろいや虚しさを尊び、玩物喪志というようなアンチ・アーカイブ的な思念を色濃く残す我が国の文化環境を考える時、貴重な記録や資源を未来に残していく活動がアーカイブというスマートな冠を得て進展していくことは大変喜ばしいことに違いない。

その反面、特にメディア芸術の分野には固有の資源

特性、すなわち、現行の知的財産、複雑な製作過程や特許を含む技術応用、巨大な産業規模と高い海外輸出力、日本を代表する新しい表現文化としての国際評価、広範で奥行きのある旺盛な消費活動に伴う多様な価値創造などがある。それらを踏まえて考えた場合、複合的で多面的な特性を折り込んで構築される保存記録や記録保存館を、我々には原義や語源がつかみづらかではない、すなわち腑に落ちきっていないアーカイブというフラットな外来語で括ってしまうことが、必ずしも設置者や利用者にとっての便益に繋がっていないのではないかという懸念がある。

逆に、それらの活動の主体や目的、その有有形(設置形態、維持管理、公開ポリシーなど)の相違や区別という、設置者や利用者がここは大事だと考えている勘所を、アーカイブというワードがむしろわかりにくくしてしまっている面があるのではないか。加えて、メディア芸術分野は、クールジャパンというスローガンとともに我が国の重要な産業政策、文化外交政策の鍵であるという位置づけを突然与えられた形になり、国レベルでの総合的な支援スキームが始動する段階になっている<sup>6)</sup>。

これらの様々な主体による様々なメディア芸術分野のアーカイブについて、それぞれの取り組みの内実に応じた支援を組み立てるとともに、国の政策として納税者、利用者に対してわかりやすい説明を行う必要があるが、アーカイブという看板だけを見ては、その支援対象の実態や内側がなかなか見えにくいという現実的な課題も生じている。

本稿では、このやや漫然とした懸念について、外来語としてのアーカイブの原義、語源から見た本義と漢字圏の日本語による類語比較を補助線とした考察を行ってみたい<sup>7)</sup>。

## 2. 外来語としてのアーカイブ

### 2-1. アーカイブの語源

英語の archive の訳としてのアーカイブは、ヨーロッパにおいてフランス語の archive(アルシーブ)、ドイツ語の Archiv(アルヒーブ)、イタリア語の archivio(アルキヴィオ)などと同根であり、ラテン語では archivum(アルキウム)が相当するが、語源については、ギリシャ語の ἀρχεῖον(アルケイオン)とされることが一般的である。アーカイブの語源に関わる考察を展開している筒井は、以下のように述べている。

「アーカイブズの語源とされるアルケイオンは、LSJによると、アルケーという語の第二義、「第一番目の地位、権威」の形容詞の中性形名詞化によって、支配を意味するアルケーに属するものを表し、アルケーの動詞アルコー(統治する)を為すアルコーンのオフィスを示す語、すなわち役所のこととな

る。また複数形は、公記録、アーカイブズを意味することがある」<sup>8)</sup>

語義的な文脈において肝要なのは、アルケイオンの冒頭のアルケー(ἀρχή)であり、それはその第二義である「一番目の地位、権威」である「支配」を意味する語意としてアルケイオンに埋め込まれているということである。アルケーの第一義は「はじまり、起源」であるようなので、なぜその第一義を主たる語意とする用法が広まらなかったのかは大変興味深い論点ではあるが、古代ギリシャ語からラテン語にいたる長い西洋の歴史とそこにおける多くの出来事に由来する問題であることから、その経緯を字義的に追いながら確認することはそう簡単ではないと理解できる。

まずは、外来語のアーカイブのルーツが、なんらかの「記録や文書の保管や所在の決定という行為に付帯する権威や地位」を表す言葉にある、ということはいえそうである。また、筒井は、この語義が広く西洋社会に膾炙していくに際しては、ラテン語で編まれた「ローマ法大全」に基づく治世においても勅令がギリシャ語で公布されていることから、アルキウムの語意がラテン語でも同義としてヨーロッパ社会に浸透し、現行の英語用法としてのアーカイブに繋がっていった可能性を指摘している<sup>9)</sup>。

### 2-2. アーカイブの病

語彙としてのアーカイブ(アルケイオン)の字義的な変遷を歴史的に辿るという営為とは別に、哲学的な考察としてジャック・デリダの「アーカイヴの病」が広く読まれるようになっていく<sup>10)</sup>。そこでは、アルケーの両義的な側面、すなわち「はじまり、起源」と「一番目の地位、権威」(あるいは支配)の関連そのものが論点になっているが、歴史的な語彙の変遷としての両義性を論じてはいない。

デリダは、アルケーの第一義「はじまり、起源」を「順序に関わるもの」すなわち「自然あるいは歴史に従う原理」としてとらえ、第二義の「一番目の地位、権威」(あるいは支配)については「法に関わるもの」すなわち「権威が、社会秩序が行使される・・・法規範的原理」として認識する。その上で、この両義はアルケーという語において同時に名指されてはいるが、その両義が「対等」あるいは「混合」としていると理解することは「本質的な理由から困難」であると断言する。そして、アーカイブの唯一の意味は、アルケイオンの主たる語源である「役所」であり、ギリシャ時代に遡れば、法を作成したり代表したりする権利を有する者がそれらを記載した公文書を管理保管した住居(住所、逗留地)を第一義とせざるを得ないと説く。

「その名称は、そう信じるのが当然のように、自然

学的、歴史的、存在論的な意味での *arkhé* へ、すなわち起源のもの、第一のもの、原理的なもの、原始的なもの、要は始まりへとまさに差し向ける。しかしそれよりもなお、そしてもっと早期には、「アーカイヴ」は法規範論的な意味での *arkhé* へ、掟の *arkhé* へと差し向ける。(中略)彼らは、委託物と記録媒体(support)の物質的安全を保障するばかりではない。彼らは、解釈学的な権利と専門知識もまた与えられている。彼らはアーカイヴを解釈する権力を持っている<sup>11)</sup>

極めて晦渋な論考であり、議論の背景となっているのがフロイトの精神分析であるため、文意を正確に理解し得ていない懸念が残るが、本稿の主題に寄せて理解できる範囲において咀嚼したい。デリダの指摘は、何かしらの起源を持つ情報の塊としてのアーカイヴそれ自体ではなく、アーカイヴの「留まり続ける場所」とそこに居る「彼ら」すなわち古くは「ギリシャにおける最高官職であるアルコーンなどの支配していた者」が、特権的にアーカイヴの意義や解釈をも規定することにあり、言葉そのものの起源において分裂せざるを得ない矛盾を内包しているということであろう。アーカイヴの「病」とはこの根源的な矛盾であり、「アーカイヴを成立させると同時に、それ自体を内側から食い破ってしまうような自律性」を指す比喩として理解できる<sup>12)</sup>。

外来語としてのアーカイヴの語源や原義の変遷を知り得ない我々ではあるが、近代的な公文書館の嚆矢はフランスが革命期に構想した国立公文書館(アルシーブ・ナショナル)にあることを知り、メディア芸術としての映画においても、1938年にアメリカ・イギリス・フランス・ドイツの4カ国が「国際フィルム・アーカイヴ連盟(FIAF)」を開設し、2018年には日本唯一の国立映画機関で国内最大のフィルム所蔵機関が「国立映画アーカイヴ」と名称を改めるなど、様々な記録や資料がアーカイヴという名の下に公的機関によって管理、保管されている経緯を見てきている。

そのため、デリダの指摘するアーカイヴの「唯一の意味」である「解釈学的な権利と専門知識を与えられている」管理人や場所というニュアンスは、日本語としてのアーカイヴというワードの成り立ちと使われ方にも染みつき、その直観的な意味合いを生成しているように思われる。

### 3. アーカイヴの陥穽

#### 3-1. アーカイヴの目的

本稿の考察の焦点は、そのニュアンスの根底にある語源としての「一番目の地位、権威」あるいは「支配」やデリダの言う「解釈学的な権利と専門知識を与えられている」という観点が、いずれも語源的には第二義としてのものでありながら、アーカイヴという語彙の前面に

貼り付いてしまっていること、そしてそのために、アーカイヴは基本的になんらかの公的機関あるいは組織であるか、公的ではないにせよ当該のアーカイヴを解釈したり専門的に研究したりすることが専横的に担保されている主体によって実施されている、という観念を喚起してしまうという点にある。

メディア芸術の領域においても、国による取り組みとしての文化庁によるメディア芸術アーカイヴ関連事業をはじめとして、NPOや大学等の非営利組織、民間企業、個人やグループなど、様々な主体がマンガ、アニメ、ゲーム等の「アーカイヴ」を呼称する活動を進めている。ここで、ゲーム分野を例にとると、国としては文化庁がメディア芸術を全般的に振興する政策事業を展開しており、その一部としてのゲーム関連の作品や資料、中間生成物等をアーカイヴする主体を支援するスキームを継続している<sup>13)</sup>。

他方で、NPOや大学がゲームソフトやハード、関連資料を一定の網羅性を持って保存し、それらを所定の条件において公開する活動もすでに長期にわたって実施されており、有力な老舗ゲーム会社が自社の開発資料等を発掘、保存する活動を進め、ゲームに関わるアーカイヴとしてその活動と保存資料の一部を公開するという動きもある<sup>14)</sup>。

これらは、全体として「ゲームアーカイヴ」という表現で紹介され、一部は連絡協議会を形成して相互連携を進めている<sup>15)</sup>。いずれも、「ゲーム文化を保存し後世に伝承する」というレベルでの大きな「狙い」はおそらく大差ないが、具体的なアーカイヴの「目的」については相当の相違が確認できる。

それぞれの主体によるアーカイヴの「目的」に当たる文言を整理してみよう。

#### ① 国によるゲームアーカイヴの取り組み

「我が国の優れたメディア芸術作品や散逸、劣化などの危険性が高いメディア芸術作品・関連資料の全国のアーカイヴ機関・所蔵館等における保存(アーカイヴ)及びその活用・公開等を支援することにより、我が国のメディア芸術の振興に資する」<sup>16)</sup>

#### ② 大学によるゲームアーカイヴの取り組み

「ビデオゲームのメタデータ流通を促進することをもって、1) 資料へのアクセシビリティの向上を通じてビデオゲーム及びそれに関連するメディアを対象とする調査研究活動を支援すること、2) ポピュラー文化のアーカイヴ関連諸施策の高度化のための知識基盤構築に寄与する」<sup>17)</sup>

#### ③ 非営利団体によるゲームアーカイヴの取り組み

「広く一般市民に対して、電子ゲーム及びその関連機器・資料等の保存技術・方法等についての研究・

開発並びにその情報の提供に関する事業、アーキビスト並びに企業・団体等との連携及びその支援に関する事業を行い、文化の振興と文化財の保存・保管による継承を図(る)」<sup>18)</sup>

④ 民間企業によるゲームアーカイブの取り組み  
「ゲーム開発資料保存・編纂の試みは、ゲーム産業全体で協力して行うべきものでもあり、日本のゲーム開発の歴史の全体像を取り戻すことで、未来への力を得ることができ(る)」<sup>19)</sup>  
「開発資料を残すことで、過去にゲームづくりに携わってきた多くの方々の知見も含めた総力戦で、新しいゲーム開発に向けたアイデアを生み出せる」<sup>20)</sup>

ゲームアーカイブを志向するこれらの代表的な取り組みを比較しても、その「狙いと目的」については多様な振幅がある。①は国の立場から【アーカイブ機関の支援】を明示しており、②は学術的な知識基盤を構築することによって【調査研究者の支援】を目指している。また、③はゲーム文化を保存するための手段としての【アーキビストの支援】を打ち出しており、④はいずれもゲーム開発の中間資料の整理と組織内共有による【ゲーム開発企業の支援】を明確に志向するものである。

### 3-2. アーカイブの扱われ方

このような「狙いと目的」における立ち位置の相違は、アーカイブの運用における機序との関連において、アーカイブ対象となっている情報資源をどのように取り扱っていくか、あるいは利用者からみるとどのような「扱われ方」がなされるかについて、同様に相当の相違を生じさせることになる。

上述の①については、現在まだ直接的なアーカイブ活動をおこなっており、現行の所蔵館あるいは活動の間接支援というスキームのため除くとすると、②のゲームアーカイブの対象となる情報資源は、基本的にオープンアクセスが可能であるか、所定のマネジメントスキームの枠内において権利者から許諾された範囲においてアクセスを可能にする形で扱われると考えられる。

また、③は情報資源をオープンアクセスとするかどうかには主眼を置くわけではなく、ゲームの歴史を体現する情報資源を形式と内容に応じてどのような技術と手法によって長期的に保存していくかという観点から取り扱っていくことになる。さらに、④については、対象となる情報資源は企業における製品開発の内部資料であり、部分的な開示は可能であったとしても知財的な意味においてはアーカイブの置かれている組織内部における機密情報としての扱い方にならざるを得ない。

このように、アーカイブの「狙いや目的」およびアーカイブされている対象の「扱われ方」において、実際の取り組みには多様な相違があり、その相違はそれぞれの

アーカイブ主体の存在論に関わる重要なモーメントであるが、社会的には総じて「ゲームアーカイブ」に取り組んでいる活動というシンプルでフラットな見え方になる場合がある。

これまで考察してきたように、その一因はアーカイブという外来語が語義として有している観念、すなわち基本的になんらかの公的機関あるいは組織であるか、公的ではないにせよ当該のアーカイブを解釈したり専門的に研究したりすることが専横的に担保されている主体であるというラベルにあると考えられる。

この語義は、上述したようにアーカイブの語源であるアルケイオンの第二義であり、第一義である「はじまり、起源」との意味の往還、融合がなされなかった(なされえなかった)結果、アーカイブという試みにおける重要なモーメントとその意義についてのニュアンスを欠落させてしまっているのである。

## 4. 日本語におけるアーカイブ

アーカイブという用語から感じられるスマートさや、ある種のパブリックネスは、文化保存の取り組みを促進する良い効果をもたらしているとも考えられる。しかし、反面、その語源、語義から不可避的に生じているある種のわかりにくさは、いずれも外来語としてのアーカイブの起源に由来するものであり、このワードの本来的な限界であろう。そうであれば、漢字圏の一角である日本においては、外来語ではなくこの限界を補えるような語義は存在しないのであろうか。

国立国語研究所の提案に戻れば、アーカイブは「個人や組織が作成した記録や資料を、組織的に収集し保存したもの。またその施設や機関」という趣意とされ、言い換え語として「保存記録」、「記録保存館」が提示されている。アーカイブされているものを保存記録とするのは日本語の文意として正確であり、それを保管する場所について記録保存館とすることもおそらく大方に違和感はないだろう。ただし、言い換え語という役割から考えると当然であるが、アーカイブの「狙いや目的」およびアーカイブされている対象の「扱われ方」の多様な差異が、この用語において表現できるかといえ難しい。

それでは、そもそも日本においてアーカイブの「狙いや目的」およびアーカイブされている対象の「扱われ方」の多様な相違を含意する語句はないかという問題意識で、表語文字としての漢字に着目してみたい。何かしらのモノあるいは情報を組織的に収集して保存すること、またそのための場所や空間という意味で考えると、直ちに「くら」が思い浮かび、漢字では「倉、蔵、庫」という常用漢字が想起される。

### 4-1. アーカイブとしての倉

「倉(くら)」の大意について、事典には以下のように

記述されている。

「蔵とも書き、食料、家財道具、衣類などを貯蔵、収納する建物。倉は母屋（おもや）と離して建てたり、あるいは母屋と倉が接していても両者の間を厚い土壁などで遮断できるようにし、火災等の災害や気候の変化から収納貯蔵物を守るところに目的がある。ただし倉の構造は用途や自然環境、立地条件などによって各地で相違があり、一方では倉が社会的に家格や資産を誇示する象徴ともなっている。日本各地の倉は、その用途からみていくと、穀物やその種子などを収納しておく穀物倉、衣類・家財道具を収納しておく倉、みそ・しょうゆや漬物類を置く倉に大別でき、構造からは、高倉、板倉、校倉（あぜくら）、蒸籠（せいろう）倉、土蔵、石蔵、穴倉（あなぐら）に分類できる。また倉の所有からは、個人（家）所有のものと村落による共同所有のものがある」<sup>21)</sup>

また、漢字の辞彙によると訓義は以下である<sup>22)</sup>。

- [1] くら、穀物を入れるくら。
- [2] 蔵と通じ、おさめる。
- [3] ひとや。
- [4] 倉黄・倉卒は、にわか、あわてる。

総じて、「倉」は穀物をはじめとする多様な収蔵物を安全にストックしておくことを目的としており、目的や構造の相違がある複雑なストレージを多様な二字熟語として提示することができる。このような用法の広がりから、「倉はものをしまっておく建物の意で広く使」われる一般名詞として多用されてきたと考えられ、倉自体や所蔵物の所有関係があるとしても、その存在のありようや建て付けにつけに関して、アクセスの随時性、場合によっては開放性、などもニュアンスされうような語意と考えることができる<sup>23)</sup>。

#### 4-2. アーカイブとしての蔵と庫

「蔵（くら）」については、倉の大意にもあるように倉と同義で用いられる場合も多いが、辞彙によれば訓義は以下である。

- [1] かくす、おさめる、ひそむ。
- [2] たくわえる、いだく。
- [3] くら。
- [4] ふかい、おくぶかい。
- [5] 蔵と通じ、はらわた、ぞうき。

第一義が重要であろう。物をしまっておく所という語意においては「土蔵」や「蔵室」、「蔵中」のように「倉」と

同義の用法が見られるが、第一義の秘匿性を意味に込めると「秘蔵」や「蔵隠（ぞういん）」、「蔵匿（ぞうとく）」など隠して表に現さないという語意の二字熟語が多数みられる。また、「蔵米（ぞうまい）」のように一般的な意味でのストック、すなわち倉と同義での用語でありながら、江戸時代に米価の値上がりを見込んだ米商人などが隠匿しておく米を「蔵米（かくしまい）」と称したように、両義的な用法も確認できる<sup>24)</sup>。さらに、「蔵書」のようにそれほど高い秘匿性を強調するわけではないが、軽くこだわりのある私蔵をニュアンスさせる用法もある。

また、「庫（くら）」は辞彙によれば以下の訓義である。

- [1] 兵車のくら。
- [2] 文書のくら、物を納めるくら、倉庫。

倉の大意を体現して常用される「倉庫」に見るように、こちらも概してストレージとしての倉や蔵と同義で用いられる場合も多い。例えば、「金庫」や「国庫」、「在庫」、「車庫」、「書庫」、「文庫」、「宝庫」などである。しかし、解字としては、广と車とを合わせた文字であり、广は屋根（建物）、車はくるまを指し、庫は屋根の下に「兵車」がしまっていることを表している。兵車は戦闘用の“くるま”であり、転じて武器全般をしまう所というのが第一義である<sup>25)</sup>。

#### 4-3. 倉・蔵・庫の相違とアーカイブ

以上に概観してきたように、日本語として用いられる常用漢字においては、アーカイブの意味に相当する訓義を有するものが複数あり、いずれも根底においてはなんらかの所蔵物をストレージするという原義を持ちながら、実際の「狙いや目的」と所蔵物の「扱われ方」において多様なバリエーションを表現しうる語義の相違を有している。まとめると以下ようになる<sup>26)</sup>。

- 【倉】(ソウ) 穀物を入れておく建物。物をしまっておく所。「倉庫」「船倉」
- 【蔵】(ゾウ) 物を貯えしまっておく所。「土蔵」「宝蔵」また、しまっておく。おさめる。「蔵書」「秘蔵」
- 【庫】(コ) 兵車、兵器を入れておく所。金品、書物などを入れておく所。「書庫」「宝庫」

例えば、2. 1 で概観したメディア芸術ゲーム分野のアーカイブの取り組み主体を考えて見ると、間接支援である①を除くと、学術的な知識基盤を構築することによって「調査研究者の支援」を目指す②は基本的に【倉】に相当する。また、ゲーム文化を保存するための手段としての「アーキビストの支援」を打ち出している③は、保存資料との向き合い方を踏まえると【蔵】に相当すると考えることができる。そして、ゲーム開発の中間資料の整理と組織内共有によるゲーム開発企業の支

援を目的とする④は、扱われている資料の多くが組織内知的財産であることから、原則的には【庫】としての性格を持つと考えられる<sup>27)</sup>。

ここまでは、そもそも日本においてアーカイブの「狙いや目的」およびアーカイブされている対象の「扱われ方」の多様な相違を表しうる語句の有無について考え、直観的に思い浮かぶ「くら」すなわち「倉、蔵、庫」について検討してきた。結論的に言えば、外来語としての成り立ちや語義の複雑さも含めて我々にはニュアンスが同定しにくい「アーカイブ」に比して、「倉、蔵、庫」はアーカイブの主体や構造、動態という側面、すなわちアーカイブの「設え(しつらえ)」を我々の歴史や生活の細かな機微に即する形で表現しているように感じられる。

もちろん、そのことを持って、現在広範に使われているアーカイブという用語に置換しようということを主張しているのではない。現在において「倉、蔵、庫」というやや古めかしい語を用いることの逆効果、唐突感が大きいことは容易に予想される。ここでの考察の要諦は、外来語のアーカイブというスマートな語が拾い損ねている情報資源保存の取り組みの実態や課題について、相互に比較したり対照したりするための思想的な補助線としての可能性にある。

これを、アーカイブの有り形、すなわち設えという観点において、誤解をおそれず単純化、比喩にするならば図1のようになる。

|                                                |
|------------------------------------------------|
| 倉：オープン志向 図書館的<br>蔵：セミクローズド 博物館的<br>庫：クローズド 企業的 |
|------------------------------------------------|

図1 アーカイブとしての「倉・蔵・庫」の設え

## 5. アーカイブの本義

### 5-1. アーカイブとしての府

以上のような考察をさらに延長させるならば、何かしらのモノ的な対象を組織的に収集して保存すること、またそのための場所や空間という意味での「くら」には、日常的にはあまり思いつかないもう一つの常用漢字、「府(くら)」がある。辞彙によればこの語の訓義は以下である。

- [1] くら、文書を蔵するところ、府庫。
- [2] つかさ、やくしよ。
- [3] もののあつまるところ、あつまる、もと。
- [4] みやこ、まち、やしきまち。
- [5] 腑(ふ)と通じ、臓腑、はらわた、内臓。

一般的な感覚で言えば、訓義の[2]や[4]に基づく形で、歴史的に役人が事務をとる場所である「近衛府」や「国府」、「大宰府」、「鎮守府」のような語例や、現代における行政府である「大阪府」や「京都府」がすぐに想起される。すなわち「ふ」と読むことが一般的であろう。しかし、第一義に「くら、文書を蔵すること」とあるように、「倉、蔵、庫」と同じ読みと意味をもつ語でもある。

訓義をみれば「[説文]に「文書の蔵なり」とあり、重要な文書は府庫に収蔵した。(中略)のち政府・官府の意となり、その所在地をいう<sup>28)</sup>とあり、解字としては、广が形を表し、付(ふ)が音を示しており、广は建物を意味する。付には「くつつく、あつまる」という意味があることから、府は、いろいろの文書を集めてしまっておく場所(倉)をいうとされている<sup>29)</sup>。ストレージするものかなりの多様性がある「倉、蔵、庫」とはことなり、府(くら)は外来語としてのアーカイブに最も近似する語彙であると言ってよい。

そして、そのことを前提とした上で、さらに第三義に注目すると「もののあつまるところ、あつまる、もと」とある。「学府(がくふ)」というような用語はこの語意を示していると言えるが、この訓義は「倉、蔵、庫」にはない。特に「あつめる」(他動詞)ではなく「あつまる」(自動詞)となっている点が注目される。

「倉、蔵、庫」の訓義を見る限り、それぞれのストレージに収納される資源体は、意識的に「あつめる」行為によって収集されたと考えられる。それに対して「府」の場合、文書を始原としてそこにあるモノや情報は、「もと」は「あつめる」形で集積されていたとしても、それが一定の蓄積になった後には自然と「あつまる」ようになったと理解することができる。そして、その「あつまり」をセンターとしてヒトも「あつまる」ようになり「みやこ」が形作られる。「在府」や「出府」などは、かつて幕府のあった江戸を示す語である。

この意味では、府に「あつまる」のは、モノや情報だけではなくヒト、ということになる。外来語としてのアーカイブの語源におけるアルケーは、第一義を「はじまり、起源」とし第二義が「一番目の地位、権威」を踏まえた「支配」であった。そして、デリダが指摘するように、第二義が「アーカイヴを解釈する権力」という側面を持つことで第一義が後景化した結果、アーカイブの意味合いは「解釈学的な権利と専門知識を与えられている」管理人や場所というニュアンスとして前景化するようになっている。

この点は、「府(くら)」についても、重要な文書が最初にストレージされた「府庫」のような用法においては同様かと思われるが、そのアーカイブをめぐる周辺に新たなモノや情報、そしてヒトが「あつまり」、その「あつまり」が政治や学問の中心になっていくというような別の語義も付帯していると考えられる。そうであれば、これはアーカイブの設えという観点からは、外来語の

「アーカイブ」や「倉、蔵、庫」とは異なる「府」の特性であろう(図2)<sup>30)</sup>。

|                  |
|------------------|
| 倉：オープン志向 図書館的    |
| 蔵：セミクローズド 博物館的   |
| 庫：クローズド 企業的      |
| -----            |
| 府：オープンセンター 知識基盤的 |

図2 アーカイブとしての「府」の設え

## 5-2. 府としての加賀

このような複合的な設えを有する「府(くら)」を実現しようとした試みとして、かつての加賀の取り組みがあった。江戸時代、加賀藩の歴代藩主は幕府に忠誠を示す目的で徹底した文化政策を採用したが、とりわけ五代藩主、前田綱紀の時代、現在の石川県金沢市は当時として稀に見る学術文化都市として繁栄した。綱紀の施政により、加賀を中心として能登地域をも含む文化工芸産業育成につながる総合的な地域振興政策が展開され、この地に伝統工芸産業が栄えただけでなく、今日に至るまで華やかな加賀百万石文化が受け継がれる基盤を築いたといえる。

綱紀は、まずアーカイブのコアとして、全国各地の工芸諸分野の製品や技法を比較対照するための工芸標本コレクション「百工比照(ひゃっこうひしょう)」を制作したが、これは前後して取り組んできた百科事典である「庶物類纂(しょぶつるいさん)」の編纂や「東寺百合文書(とうじひやくごうもんじょ)」の膨大な資料整理などと同様に、体系的な目録やデータベースのノウハウを構築しながら組織化されてきた工芸文化資源アーカイブと評価できるものである。

これについては、「府(くら)」のストレージとしての機能として理解できるが、そのアーカイブをベースとしつつ、外来の招聘者のノウハウを移転して工芸品の製作を行なう製作工房「御細工所(おさいくしょ)」を開設し。そこから生み出されたハイレベルの道具や工芸品を利用する生活文化の啓発や芸道の奨励を行うことによって、多くのヒトやモノが「あつまる」という「府」のより深層にある機能を政策的に成熟させていった点に加賀藩の取り組みの真髓がある<sup>31)</sup>。幕府の政治顧問であった新井白石は、加賀藩の取り組みを賞賛し、「加賀は天下の書府なり」と述べているが、これは正にこの点に関わっている。

現代において、白石の「書府」というキーワードを援用し、工芸、文化資源の総合的なアーカイブをベースとしたオープンセンターとしての「府」を加賀能登の地に再現しようとした試みが「石川新情報書府」(以下、「書府事業」と略す)である。書府事業は、石川県の地

域文化をコンテンツとする総合的なアーカイブ事業として、1996年から2015年まで20年間継続した<sup>32)</sup>。

## 5-3. 新しい府としての石川

書府事業は、加賀藩の取り組みも含めた石川県地域の文化、社会の歴史的文脈を踏まえてその構想が検討され、アドバイザーにデジタルアーカイブというコンセプトの提案者でもあった東京大学の月尾嘉男教授(当時)を迎えて、世界的にも先進的な官民一体型のデジタルアーカイブ事業として開始された。その公益文化アーカイブ事業としての成果目標は、以下のように設定されている<sup>33)</sup>。

### 1) 文化資産の保存・継承と石川県の個性を情報発信

石川新情報書府構想は、国際的なデジタルアーカイブの流れに対応して文化資産の保存・継承に寄与するとともに、文化資産という石川県の個性を情報発信することを目指す。

### 2) 情報通信関連産業の振興

デザイン、出版・印刷、映像・音楽、コンピュータ関連などの情報通信関連産業が連携し、最先端のデジタル技術を駆使し、高品位なマルチメディアソフトを製作することにより技術を向上させ、石川県の基幹産業として発展することを期待する。

### 3) 伝統文化関連産業の振興

石川県の伝統文化を世界に向けて情報発信することで、伝統文化関係者間の交流を促進する。さらには情報通信技術を活用することで、新たな受注機会の開拓や新たな作品の発案などを期待するとともに、伝統技術の保存・継承につながることを願う。

書府事業は石川県全体の文物風土を対象とする大規模な文化産業事業であり、その意味で総合的な評価がなされる必要があるが、アーカイブ事業としての側面を見た場合、事業モデルとなっている加賀藩の文化産業政策とその経緯との近似性を見出すことができる。すなわち、先ず事業の前半10年近くをかけて歴史の長い石川県の多彩な文化や文物、行事、習俗、自然の大部なデジタルアーカイブを構築することからスタートする<sup>34)</sup>。

### 第1期(1996～1998年度)

輪島塗、九谷焼、山中漆器、加賀友禅など県・国指定等の伝統工芸36業種を対象に、CD-ROM及びインターネットコンテンツの制作を行い、のべ56企業の参加により10テーマの作品の保存、発信を行った。石川県の神髄とも言える伝統工芸のデジタルアーカイブが一巡したところで、1999年度には発展構想策定委

員会が結成され、次の展開が模索されている。

## 第2期(2000～2004年度)

第2期前期は、企業の発想力と企画力を育成するため、テーマを自由テーマとし、また、県外の優良企業とのコンソーシアム形成を条件に加え、DVD及びインターネットコンテンツの制作を行い、のべ41企業の参加により11テーマの作品の保存、発信を行った。この取組は、広くユニークなテーマの発見・地域資産の発見による多彩な提案がなされた一方で、提案テーマ自体の妥当性が課題となり、1期及び2期の優れた点を複合化することが検討された。これを受けて、第2期後期では指定テーマと自由テーマを設け、指定テーマについては2ヵ年事業、撮影はハイビジョンを条件とし、DVD及びインターネットコンテンツの制作を行った。期間において、のべ12企業の参加により、4テーマの作品の保存、発信を行った。2004年度には、石川県の産業政策ビジョンの改訂(石川県産業革新戦略の策定)に合わせ、書府事業の次の展開となる第3期構想の策定を行っている。

そして、続くステップにおいては、第1期から第2期にかけて蓄積したコンテンツや、企画力とプロデュース力を向上させた地元企業のレベルアップを確認した上で、アーカイブされたデジタル資産を地域産業の発展に活かしていくという観点が事業に盛り込まれてくる。「くら」にストレージされた文化資源を活用して、モノやヒトが「あつまる」所としての石川をプロモーションする仕組みを構築しようという構想である。

## 第3期(2005～2007年度)

すぐれた内容を有する地域文化デジタルアーカイブは、文化的資産の保存・継承のための最良の装置であるだけではない。地域の貴重な文化資源を生かし、さらに全国、世界に向けて地方の魅力を発信していくためのプラットフォーム、すなわち地域活性化、地域振興、地域経営的な課題に答える文化経済のエンジンであるという事業目標を設定した。この観点から全国的な映像マーケットに進出しようとする内容とクオリティを有したテーマ募集を行い、6テーマの作品を制作するとともに、石川県を舞台とする全国公開映画の誘致、製作協力という新しい地域資源の活用事業を行った<sup>35)</sup>。

## 第4期(2008～2015年度)

第3期につづいて、さらに地場産業のブランド力向上、全国および世界へのマーケティングを主眼とした政策への転換を進めており、全国公開の地元映画も2作目を製作した<sup>36)</sup>。また、地元出身の日本画家、長谷川等伯のキャラクタ化(とうはくん)とテレビ放送を通じたそのビジネス展開や、後に開業する北陸新幹線の

車内放送を念頭においた石川県のハイクオリティなプロモーション映像などが採択案件となっている。

書府事業においては、地域の伝統的な文化芸術のコンテンツ制作を行政が発注し、一定の条件において受託者と権利をシェアするという新しいスキーム(日本版パイ・ドール制度)を援用するなど新しい試みが実施され、その後全国各地で地域文化資産のデジタルアーカイブ化事業が検討、実施される際のモデル事業となってきた<sup>37)</sup>。書府事業は、このような経緯とステップを踏まえて、公的な地域アーカイブ事業としては非常に長期にわたって実施され、県内の印刷会社等を中心とする旧来の事業者の情報組織化とコンテンツクリエイションの地力を格段に向上させてきたと言える。

上述した「府」の本義に即して、書府事業の成果を確認するならば、まずアーカイブ事業としての側面、すなわち「くら」としての側面がある。九谷焼や加賀友禅、輪島塗をはじめとする石川県の伝統的な文化資源について、モノとしてだけではなく、その由来や現状にまつわるコトも含めた厚みのあるデジタルアーカイブを構築し、採択企業との共同著作物としてパッケージ販売も行っている<sup>38)</sup>。地方の伝統的な文化資源を対象として、これだけまとまったデジタルアーカイブが構築されてきた例は他に類を見ない。

そして、モノや情報、ヒトが「あつまる」所としての側面については、第1期から第2期までの間だけの成果としても、以下のように整理されている<sup>39)</sup>。

### (1) 企業・人材の育成

- ・プロデューサ及び要素技術者の育成
- ・地域の文化資産発掘普及者：文化的アセットマネジャー
- ・コンクールでの入賞
- ・デジタルアーカイブ専門研修の開始

### (2) コンテンツ産業の受注、集積を促進

- ・人口当たり事業所集積全国第3位、従業者数第4位、売上高7位
- ・金沢市内の事業所数が東京以外の全国の市町村のうち全国第13位
- ・県内企業の電子商取引導入率は12.7%で全国第2位

### (3) 日本を代表するデジタルアーカイブ事業としての地位の確立

- ・国や各県等の政策立案への関与
- ・第1回全国デジタルアーカイブ研究大会の開催
- ・国際会議での紹介
- ・コンクール等での受賞

### (4) コンテンツのコンテキスト化・物語性の芽吹き

また、第3期以降の成果としては、書府事業として製作協力を行った映画「しあわせのかおり」のデ

リバティブ戦略として、伝統工芸である輪島塗、珠洲焼の全国マーケティングを狙ったネット配信映像を製作し、インターネットショップとの連動による新しい地域産業のビジネスモデル構築と実践を進めたことなども、「あつまる」という側面の成果として確認できる<sup>40)</sup>。

現在このエリアは、北陸新幹線の開業による大規模なインバウンド需要の拡大期にあるため、モノやヒトが「あつまる」という事象における書府事業の直接的な効果を限定して推計することは困難であるが、書府事業は、石川県の文化資源の収集と保存をプラットフォームとして、エリア全体をモノやヒトが「あつまる」所としての「府(くら)」にしていくことを強く志向したアーカイブ事業であったと評価できる<sup>41)</sup>。

## 6. 結びにかえて

本稿の要諦は、日本語においてアーカイブに近い語意をもつ言葉とその語義を詳細に検討することで、外来語のアーカイブというスマートな語が拾い損ねている国内の様々な情報資源保存の取り組みの実態や課題について、相互に比較したり対照したりするための思考的な補助線が引けないかという点にある。

アーカイブという外来語は、その語源から用語としての意味合い、使われ方の経緯や変遷など、長く複雑な過程をたどって現在の英語として定着していることは間違いないが、我々としてはそのニュアンスを正確に感じ取ることは困難である。それに対して、日本語としての「くら」、すなわち「倉、蔵、庫」や「府」については、それぞれの有り形としての設えを、我々の長い生活の中で使われてきたニュアンスとともに腑に落ちる形で感得することができるのではと思う(図3)。

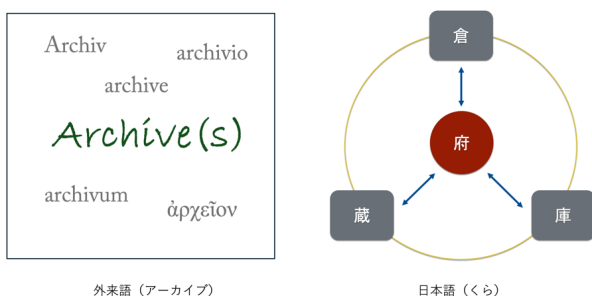


図3 「アーカイブ」と「くら」

そうであれば、それぞれのアーカイブの有り形、設えに応じて、何々倉や何々蔵、何々庫、あるいは何々府というネーミングにすることもあり得るとは考えられるが、そこはおそらくそのようにするよりは、多くの場合何々アーカイブとすることが選択されるであろう。アーカイブという語彙について、語源や語意としてわかりにくさがある

としても、語感としての使いやすさや語呂のスマートさが勝っている状況には現在のところ変化はなさそうである。

Archive と同様に、我々の歴史においてはその本当の語意を感得することが困難であろう Society や Culture というような単語についても、明治時代の導入期において中国典籍からの援用などによって「社会」や「文化」と訳された経緯があった<sup>42)</sup>。それぞれあまり適切な日本語としての訳になっていないという意見がありながら、その訳語自体が長く様々な領域で用いられることによって研磨され、補遺され、相互了解されてきた、つまり「こなれて」きた歴史がある。Archive の場合についても、導入時になにかしら強引な翻訳をしておけば、長い時間軸の中でこなれた日本語となった可能性はあるが、もはやそのタイミングを失った感もある。

そういう意味での Archive の訳語、代替語にただちになるという訳ではないが、本稿の中で示してきたように、日本語の「府(くら)」は、その訓義において外来語のアーカイブに非常に近似する語意をもつ漢字であった。さらに、それを超えてアーカイブの多様な有り形、設えを語義として抱合する奥行きを持ち、アーカイブが何らかのモノや情報をただストックしたり解釈したりするだけではなく、その価値や意味を求めてさらにモノやヒトがあつまってくるような環境や制度、組織、事業を生み出していく、いわば「公共的知識基盤」<sup>43)</sup>のようなニュアンスをも示しうることは重要である。

今後の課題としたい点は 2 つある。一つは、アーカイブの原義と府のそれとの類似と相違の根底にあるものをもう少し深掘りしたいということである。「府」の第三義における「もと」という訓義からは、アーカイブの語源であるアルケイオンを構成する第一義である「はじまり、起源」との関連が想起される。「アーカイブの病」によって「失われた」この第一義が、「府」においてはどのような意味合いであったのか、そして西洋と同じように東洋においても「根源的な矛盾」によって語意から喪失してしまったのか、など大変興味深い論点が見えてくる。この問題についてはアーカイブの語源に潜む統治制度(デモシオン、democracy)との関連性<sup>44)</sup>など筆者の専門を超える考察を必要とするため、慎重な課題設定が必要となる。

もう一つは、府(くら)という言葉について、アーカイブの原義を豊かな文脈に展開しうる語意的な可能性を指摘し、その具体的な施策例として石川新情報書府を取り上げたが、地方自治体における文化情報産業の高度化を軸とするこのような取り組み以外の府(くら)のタイプについては、さらに実証的な検討が必要であるという点である。この文脈においては、日本の表現文化資源を中心とする学術的なアーカイブ構築をスタートとして、国内外における日本文化研究のコミュニティとの接点を拡大しつつ、アーカイブ基盤の拡大と技術

的な深化を同時に達成することで文科省国際共同利用・共同研究拠点の認定も得て、多くのモノや情報、ヒトがあつまる場に展開していった立命館大学アート・リサーチセンターなど、アクティブで戦略的な学術系アーカイブ機関を対象としていきたい。

[注]

- 1) 参考文献等 [1]、p. 8 を参照されたい。
- 2) メディア芸術とは「文化芸術基本法」第九条に規定される「映画、漫画、アニメーション及びコンピュータその他の電子機器等を利用した芸術」を指すが、本稿においては、特に MANGA と総称されることもあるマンガ、アニメ、ゲーム分野を中心に想定している。  
[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/shokan\\_horei/kihon/geijyutsu\\_shinko/index.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/kihon/geijyutsu_shinko/index.html)
- 3) 行政では文化庁の「メディア芸術アーカイブ推進支援事業」などが典型的な事例であるが、後に例示するように、大学や NPO、民間においても多くのアーカイブを名称とする活動がある。  
[https://www.bunka.go.jp/shinsei\\_boshu/kobo/94006901.html](https://www.bunka.go.jp/shinsei_boshu/kobo/94006901.html)
- 4) CiNii Research, <https://cir.nii.ac.jp>, 2024 年 9 月 17 日段階
- 5) 参考文献等 [1]、p.8。
- 6) 文化庁「マンガ、アニメ、特撮、ゲーム等の国際的な振興拠点及びメディア芸術連携基盤等整備推進に関する検討会議」参考資料集を参照されたい。  
[https://www.bunka.go.jp/koho\\_hodo\\_oshirase/hodohappyo/pdf/94106301\\_03.pdf](https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/pdf/94106301_03.pdf)
- 7) 筆者は、司馬遷の史記、班固らの漢書などの漢籍を初めて現代語訳した中国文学者の小竹文夫、武夫を親族に持ち、幼少より近傍で育ったが、もとより漢籍・漢文の素養も知識もなく、外来語についての言語学的、歴史的な知見も持たない。以下の考察は、基本的にこの問題（アーカイブの原義に内在するわかりにくさ）と格闘してきた専門分野の先達と漢字研究の成果を集約した辞典、字解の解釈に依っている。したがって、本稿は雑駁な知識に基づく暫定的な覚書というべき位置づけにある。
- 8) 参考文献等 [2]、p.105。なお、単数形のアーカイブと複数形のアーカイブズ（アーカイブス）の相違や標記の歴史的な経緯については、複雑な問題のようであるが、ここでは触れないことにする。参考文献等 [3] を合わせて参照されたい。
- 9) 参考文献等 [2]、p.108。
- 10) 参考文献等 [4]
- 11) 同上書、pp.2-3。
- 12) 参考文献等 [5] を参照されたい。

- 13) 「メディア芸術の振興」（文化庁）  
[https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/media\\_art/](https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/media_art/)  
現段階では、この事業は国（文化庁）が主体となってゲームを含むメディア芸術のアーカイブを構築しようとするものではないが、メディア芸術関連事業の蓄積と成果を基礎として、直接的なメディア芸術関連アーカイブの構築を目的としたメディア芸術ナショナルセンターの計画が具体化しつつある。  
[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashinrikai/kondankaito/geijyutsu\\_kiban/pdf/94106301\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashinrikai/kondankaito/geijyutsu_kiban/pdf/94106301_01.pdf)
- 14) 例示としては以下のような活動がある。  
RCGS コレクション（立命館大学ゲーム研究センター）  
<https://collection.rcgs.jp>  
NPO 法人ゲーム保存協会  
<https://www.gamepres.org>  
スクウェア・エニックス開発資料発掘プロジェクト「SAVE」  
[https://cedil.cesa.or.jp/cedil\\_sessions/view/2670](https://cedil.cesa.or.jp/cedil_sessions/view/2670)  
ナムコ開発資料アーカイブプロジェクト  
<https://funfare.bandainamcoent.co.jp/tag/>
- 15) ゲームアーカイブ推進連絡協議会  
<https://consortiumforgamearchive.blogspot.com>
- 16) 文化庁「令和 6 年度文化芸術振興費補助金メディア芸術アーカイブ推進支援事業について」  
[https://www.bunka.go.jp/shinsei\\_boshu/kobo/94006901.html](https://www.bunka.go.jp/shinsei_boshu/kobo/94006901.html)  
なお、国によるゲームの保存ということで考えると、国立国会図書館が 2000 年前後から実施しているデジタルゲームのソフトウェアの収集が想起されるが、この活動については納本制度の枠内であるということもあり、本稿におけるアーカイブ活動とは一旦切り離しておきたい。この活動自体の経緯と詳細については、参考文献等 [6] を参照されたい。
- 17) 立命館大学ゲーム研究センター「RCGS コレクション」概要  
<https://collection.rcgs.jp/page/about>
- 18) NPO 法人「ゲーム保存協会」定款  
[https://www.gamepres.org/public/令和元年度\\_定款.pdf](https://www.gamepres.org/public/令和元年度_定款.pdf)
- 19) 資料を資産へ、スクウェア・エニックスにおけるゲーム開発資料発掘プロジェクト[実践！資料保存活動の現場編]  
[https://cedil.cesa.or.jp/cedil\\_sessions/view/2670](https://cedil.cesa.or.jp/cedil_sessions/view/2670)
- 20) ゲームをアーカイブすることの大切さとは？「ナムコ開発資料アーカイブプロジェクト」  
<https://funfare.bandainamcoent.co.jp/1115/>
- 21) 参考文献等 [7]、項目 [倉] より。
- 22) 本稿における漢字の訓義についてはすべて参考文献等 [8] による。
- 23) 参考文献等 [9]、項目 [倉] より。

- 24) 参考文献等 [10]、項目 [くら・まい【蔵米】] [かくし・まい【蔵米】] より。
- 25) 参考文献等 [8]、項目 [庫] より。
- 26) 参考文献等 [10]、項目 [くら【倉・蔵・庫】] より。
- 27) ここでの各主体とその活動に対する倉・蔵・庫の当てはめは、本稿の考察における語義の検討を背景にした比定であり、実際の活動の詳細や具体例においては必ずしも妥当しない側面がありうることを確認しておく。
- 28) 参考文献等 [8]、項目 [府] の「字形」より。文中の「文」や「蔵」は古語であり字体を正確に表示しえていない。
- 29) 参考文献等 [11]、項目 [府] より。
- 30) モノとヒトが「あつまる」という語義については、和英辞書において「倉、蔵、庫」の英語訳が基本的に a storehouse [warehouse] とされることに對して、「府」については [中心となるもの] a center とされていることにも現れている。辞書は参考文献等 [12] を用いた。
- 31) 天下の書府と称された加賀藩の取り組みの経緯と詳細については、参考文献等 [13]、pp.2-3 を参照されたい。
- 32) 書府事業の管轄は石川県商工労働部である。筆者は、書府第2期事業（2000～2004年）より監修委員、第3期事業（2005～2007年）以降は監修委員長を務めてきた。
- 33) 参考文献等 [13]、p.6 を参照されたい。また、本稿の趣旨とは異なるが、コンテンツ活用型地域振興政策という観点からの総合的な書府事業の評価と分析については、参考文献等 [15] を参照されたい。
- 34) 以下の書府事業についての記述は、筆者の業務記録と参考文献等 [13] および [14] を参照している。
- 35) 企画誘致および製作協力した映画は、2008年10月公開の「しあわせのかおり」（三原光尋監督、中谷美紀・藤竜也主演、東映配給）である。
- 36) 2009年11月公開の「RISE UP」（中島良監督、林遣都・山下リオ主演、SDP配給）である。
- 37) 書府事業を含む地域文化デジタルアーカイブの全国的な状況と展開については、参考文献等 [16] を参照されたい。
- 38) 単体のパッケージ型ソフトウェアが構想されていた第1期～第3期においては、31タイトルが製作されている。第2期までに制作されたものの詳細については、参考文献等 [14]、pp.22-23 を参照されたい。
- 39) 各項目の成果の詳細については、参考文献等 [14]、pp.2-5 を参照されたい。
- 40) 「しあわせのかおり」アナザーストーリーとして制作された「～故郷 珠洲～ この街で暮らして行こう」（三原光尋監督、石川新情報書府）である。  
<https://suzuware.jimdofree.com/この街で暮らして行こう/>
- 41) モノやヒトが「あつまる」という事象の一指

標として、地域アーカイブ事業単体の経済波及効果を設定することは可能である。ただし、それを推計して同定することは、他の諸々の経済社会要因の波及効果への干渉を考えると容易なことではない。いくつかの困難性を踏まえた上での試行的な研究としては、参考文献等 [17] を参照されたい。

- 42) これらの単語の翻訳の過程については、西洋文明導入期のかなり混乱した事情と経緯がある。参考文献等 [18] を参照されたい。
- 43) 「デジタルアーカイブ憲章」（2023年6月6日デジタルアーカイブ学会2023年度第1回理事会にて採択）  
<https://digitalarchivejapan.org/wp-content/uploads/2023/06/DA-Charter-ver-20230606.pdf>
- 44) 参考文献等 [2]、pp.106-109 を参照されたい。

[参考文献等]

1. “「外来語」言い換え提案第2回 平成15年11月”. 国立国語研究所.  
[https://www2.ninjal.ac.jp/gairaigo/Teian2/iikae\\_teian2.pdf](https://www2.ninjal.ac.jp/gairaigo/Teian2/iikae_teian2.pdf)
2. 筒井 弥生. アーカイブズの語源アルケイオンについての一考察. 人文・自然研究 = Hitotsubashi review of arts and sciences / 人文・自然研究編集委員会 編. (9):2015,p.100-115.  
<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R000000004-I026435510>
3. “「アーカイヴ（アーカイブ）」という言葉について”. 塩川伸明ホームページ.  
<https://www7b.biglobe.ne.jp/%7Eshiokawa/notes/arkhiv.htm>
4. ジャック・デリダ [著]ほか. アーカイヴの病：フロイトの印象. 新装版, 法政大学出版局, 2017.1, (叢書・ユニベルシタス ; 947). 978-4-588-14037-2.  
<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R100000002-I027837201>
5. “デリダ「アーカイヴの病—フロイトの印象」書評 破壊と再生もたらした両義性”. 好書好日 (評・斎藤環 朝日新聞掲載：2011年02月27日).  
<https://book.asahi.com/article/11648337>
6. 齋藤 朋子. 国立国会図書館におけるゲームソフトの収集と保存：ナショナルな協力体制確立の必要性. デジタルゲーム学研究 = Journal

- of digital games research / 日本デジタルゲーム学会 編. 6(1):2012, p.37-41.  
<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R000000004-I024224609>
7. 日本大百科全書 7. 2 版, 小学館, 1994.1. 4-09-526107-2.  
<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R100000002-I000002800295>
  8. 白川静 著. 字通. 普及版, 平凡社, 2014.3. 978-4-582-12815-4.  
<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R100000002-I025326515>
  9. 新村出 編. 広辞苑. 第 7 版, 岩波書店, 2018.1.  
<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R100000002-I028720369>
  10. 小学館国語辞典編集部 編. 日本国語大辞典 第 1 巻(あ-こ). 精選版, 小学館, 2006.1. 4-09-521021-4.  
<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R100000002-I000008032265>
  11. 小林信明 編. 新選漢和辞典. 第 8 版 新装版, 小学館, 2022.2. 978-4-09-501461-6.  
<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R100000002-I031948277>
  12. 近藤いね子, 高野フミ 編. 小学館プログレッシブ和英中辞典. 第 4 版, 小学館, 2011.3. 978-4-09-510254-2.  
<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R100000002-I000011129829>
  13. 『石川新情報書府の角度-文化産業の叡智を啓く-』石川県商工労働部産業政策課, 社団法人石川県情報システム工業会, 平成 15 年 12 月.
  14. 『石川新情報書府第 3 期構想～魅力ある世界地域・いしかわをめざして』石川県, 平成 17 年 3 月.
  15. 福田 一史ほか. コンテンツ活用型地域振興の類型化に関する比較事例研究. 立命館映像学 / 立命館大学映像学会 編. (3):2010,p.71-87.  
<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R000000004-I024095540>
  16. 笠羽晴夫 著. デジタルアーカイブの構築と運用: ミュージアムから地域振興へ, 水曜社, 2004.11, (文化とまちづくり叢書). 4-88065-139-7.  
<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R100000002-I000007546629>
  17. 宮田 悠史. 地域におけるデジタルアーカイブによる経済波及効果の推計: 地方自治体が草創期に構築したデジタルアーカイブを事例と

して. アート・リサーチ = Art research.

23:2023.3,p.19-31.

<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R000000004-I032847505>

18. “「文化」という語の意味をめぐって一語義の変化を捉えるということ 柴田 雅生 教授”. 人文学部日本文化学科オリジナルサイト | 明星大学人文学部日本文化学科.  
<https://www.jc.meisei-u.ac.jp/course/98/>

URL のあるものはすべて 2024 年 9 月 17 日参照